

卓見 異見

レオネッサ社長
秋山 ゆかり



あきやま・ゆかり 米イリノイ大理卒、奈良先端大情報工学修士。インテル日本法人、BCGを経てGEインターナショナル戦略・事業開発本部長、日本IBM事業開発部長などを歴任。12年経営コンサルティング会社のレオネッサ設立。声楽家。42歳。

印象違ったパキスタン

中東、アジア、アフリカなどの途上国での新規事業開発に携わって10年近くになる。多くの友人から、治安が悪いくらいと仕事をしなくてもいいと反対されてきた。特にパキスタンは、イスラム過激派の活動やマララ・ユスフザイさんのノーベル平和賞受賞などの報道で、危険で女性差別が激しい国という印象が強かった。

国の印象というものは、仕事を始める前と実際に始めた後では、大きく変わる。だから、仕事の機会があれば、食わず嫌いをしないと決めている。

百聞は一見にしかず

非常に危険な目にはめつたに遭わないが、滞在中に暴動が起き、バスポートと飲み水のペットボトルを持って、クローゼットの中に丸一日隠れたことがある。戦闘が突然始まり、ハンドバッグ一つで出国したこともある。しかし、現地で人脈を築き、安全な場所や体制を確保すれば、生命のリスクを感じることはほとんどない。逆に、現地の人たちから守られていると感じることの方が多い。

パキスタンの仕事を通じて、最も驚いたことは、政府高官や企業の大幹部に女性が多いことだ。イスラム圏なので、私もベールをかぶって仕事を

する。先日、いつも通りベールをかぶって出席した経済政策の会議で、「男性はいないからベールをとつたら？」と言われ、女性しかないことに気付いた。「男に任せると、いろいろな建物しか造らないから、女が中心でやっているのよ」と笑いながら場を仕切っていたのは、英国の大学で博士号を取得し、欧米企業でマネジメント経験のあるパキスタン人女性。

この人以外にも、リーダー層の女性によく会う。日系大手企業の役員や日本政府高官の女性に出会うよりもはるかに多いと感じるほどだ。先述の彼女は、女性首相が出ていない日本のほうが、女性の社会進出が遅れていると感じているようだ。パキスタンでは、1988年にイスラム世界初の女性首相として故ベナジール・ブットー氏が就任した。

活躍する女性リーダー

彼女らは、由緒ある家に生まれ、海外留学や企業・政府内でのポジションを得ている特権階級の特異な人たちかもしれない。しかし、女性が、国内外で高等教育を受けるだけでなく、キャリアをしっかりと築き、政治や経済の場でリーダーとして物事を進めているのは、私が今まで抱いていたパキスタ

人と交流、世界の変化体感

ンのイメージを大きく変えた。12年のパキスタンの女性の識字率は47%で、男性の70%と比べて大きな差がある。内訳をみると、都市部の裕福な家庭が多い地域では、8割以上の少女が高等教育を受けており、農村部の少女は2割強しか高等教育を受けていない。地域での格差は課題だ。

都市部で高等教育を受けた少女の一部は、さらなる教育機会を求め、欧米に留学する。欧米でキャリアを積んだ後、帰国し、自分の経験と知識を積極的に生かし、経済発展に貢献している。そして、後進育成のために、女性向けのプログラムを次々と立ち上げている。最近では女性のみで行う起業プログラムが流行している。男性に頼らずとも、女性が自分の力で生計を立てることができるようになれば、社会は変わっていくと信じている人は多い。

「未来創る」確かな意志

彼女らは、キャリアか家庭かと迷うことなく、子どもを産み育てるという女性としての役割を果たしながら、男性社会の中で自分たちの活躍の場を創りだしてきている。手料理を振る舞いながら、けらけらと明るく笑う彼女たちに、悲壮感も迷いも全くない。

「マイノリティーだからこそ、できることがある。この国の未来は、私たちが創っていくのだから」。そう強く言い切った仕事にまい進する彼女たちは、とてもまぶしく見える。

マララさんのスピーチで、女性の教育機会が奪われ、差別されているというイメージが世界的にできたこの国でも、女性の社会進出によって、変化の兆しはある。マスコミが創りだすイメージだけでなく、自分の目で見て、その国の実態を肌で感じ、その国の人々と交わることで、その良さを感じてほしい。そして、多くの人たちと一緒に、世界の未来を創っていく仕事に、興味を持って挑む楽しさを味わおう。(今回は熊本県知事の蒲島郁夫氏です)